日本建築学会原発長期災害対応特別研究委員会　オンライン公開研究会

日時　　2023 年 2 月 25 日（土）　１７時～１９時　　オンライン zoom　下記

https://us02web.zoom.us/j/87476558997?pwd=dy9od2dTTUdoVzQ2QVlEb3kxdURDZz09

ミーティング ID: 874 7655 8997

パスコード: 743848

参加　　建築学会会員及び会員外を含む。誰でも可

参加費　無料

定員　　１００名

タイトル

「原発事故復興事業を『開発との遭遇』（エスコパル）から考える」

１.『開発との遭遇』の解題　　北野収（獨協大学外国語学部交流文化学科教授、『開発との遭遇』翻訳者）　　30 分

２.『開発との遭遇』からの刺激／開発型原発事故復興の問題　　糸長浩司（原発災害特研代表）　20 分

討議　　原発事故からの開発型復興を問う

　進行　　糸長浩司

　コメント　　窪田亜矢

　討論　　北野、窪田、糸長、原発長期災害対応特別研究委員会委員

趣旨

　西洋的近代化による第３世界への開発政策、開発至上主義的潮流に対して、1980 年代から脱開発の旗手として世界的に著名なアルトゥール・エスコパルの大書『開発との遭遇』の翻訳がやっと、北野収教授の長年の労苦により出版された。開発とは何か。科学・技術革新による開発とは何か。近代は自然と人間の関係性を歪め自然を対象物としてとらえ収奪し、改変し、利用するシステムを構築した。その西洋的価値観、ユニバース（単一の世界）的価値観による開発に対抗して、第三世界の含めたプルーバース（多元世界）的価値観により人新世の地球課題への解決の道筋を提案してきたエスコパルの集大成の書である。

　原発事故対応の復興事業は、西洋近代的な開発型の復興事業そのものであり、原発事故被災者は第三世界の民のように扱われている。国主導の上から目線の復興開発事業を押し付けられているともいえる風景が被災地現場に展開されていないか。廃炉工程も不確かで、かつ危険性を長期的に孕む中で開発型復興事業である。**新たな「復興開発との遭遇」が今、福島の復興現場で起きている。原発長期災害地では、事故前は原発開発、事故後は復興開発という開発との遭遇が続く。**

　『開発との遭遇』の翻訳者で国際開発論学者の北野収教授をお招きし、『開発との遭遇』を解題していただき、その後、開発という思想・言説の何がどう歴史的、今日的に問題なのか、日本の現代における地方開発・都市再開発、そして、原発事故地での開発的復興について討議を深めていきたい。

　工学系学術団体にとって、科学・技術開発がどう利用されるのか、科学・技術の川下との関係性をどう考え、科学・技術の本質的あり方を変革することが今求められている。開発経済振興政策、「デベロップメント・ポリティックス」に利用される科学・技術とは何かも考えていきたい。

「開発に対するオルタナティブ」を提起した開発学の現代の古典

言説・表象としての開発「問題」を、**著者はフーコーの生権力概念を大胆かつ明確に現実世界に投影させ、「開発の民族誌」を編んでいく**。本書は南米コロンビアを実験地として、世界銀行調査団という「黒船」がこの国に入って以来（1949 年）の、三つの生権力の物語を軸に展開される。

まず、**「言説としての経済学」**という物語。ここでは、**現実の分析から理論を導き出すのではなく、理論によって単純化・カテゴリー化したものを「現実」として見なす「言説製造の仕組み」が語られ**、いわゆる農学、栄養学等、第三世界に導入されたあらゆる近代諸科学に共通する本質が明らかにされる。次に、アメリカや世界銀行の援助を受けた農村開発や栄養改善のプログラムが一国の隅々にまで官僚組織制度を張り巡らせながら**「開発言説効果」を浸透させていく物語**、最後に、新たなターゲットとして農民が生産者、女性が追加労働者、自然が資源として切り取られ、開発に新たな意味づけがなされていく物語を通して、現代世界を今も覆い続ける「開発幻想」「『持続可能な開発』への夢」からの覚醒が呼びかけられる。

開発の時代の幕開けから 70 余年。9・11、福島、新型コロナを経て、**今私たちは「持続可能な開発」言説の下にある規律統治権力の最新バージョンに直面している。「開発のためのオルタナティブ」ではなく「開発に対するオルタナティブ」を提示する本書**（1995 年初版、2012 年増補版）は、現代文明と政治社会の根幹部について熟考を迫る「現代の古典」ともいうべき開発学の必読書であり、コロンビアと同様アメリカの実験国家である日本に住む私たちに、現在進行中の状況を考える至高の分析視角を提供する。

（きたの・しゅう 獨協大学外国語学部交流文化学科教授）